

1章 生き方を支える山形の精神文化



1 出羽三山と山形の精神風土

コラム 7

蜂子皇子と出羽三山の開山

出羽三山の開山は1,400年余前の593(推古元)年と言われています。第32代崇峻天皇の御子である蜂子皇子が、聖徳太子の勧めにより宮中を逃れ、越路(北陸道)を下り、能登半島から船で海上を渡り、佐渡を経て由良(現鶴岡市)の浦に辿りついたところ、三本足の大きな鳥が飛んできて、羽黒山へ導いたと言います。

蜂子皇子はそこで難行苦行の修行を積まれると、ついに羽黒の大神「伊氏波神」のご出現を拝し、羽黒山頂に社を創建され、その後月山、湯殿山を開かれたそうです。これが、羽黒山に伝わる開山の由来です。

蜂子皇子は、五穀の種子を出羽国に伝え、人々に農耕を教え、産業を興し、治病の方法を教え、人々のあらゆる苦悩を救うなど、幾多の功徳を残されたそうです。全て民の苦悩を能く除くという事から能除太子と称され、91歳で薨去されました。



蜂子皇子御尊影
(左下が金剛童子、
右下が除魔童子)

(1) 出羽三山信仰と「三関三渡」(生まれ変わり)の旅

出羽三山は、山形県の中央にそびえる月山(1,984m)・羽黒山(414m)・湯殿山(1,504m)の総称であり、月山を主峰として羽黒山と湯殿山が連なる優美な稜線を誇っています。「西の伊勢参り」、湯殿山を中心とした「東の奥参り」と言われるほど多くの人たちの信仰がありました。地域によっては、15歳になった男子はそれをしなければ一人前と認められないほど、出羽三山詣は重要とされていました。

日本列島においては古くから、山や川、木や石、動物などを神そのものとする考えや、山や川が神の住処であり、神によって生み出されたものとする考えがあったようです。また人間は神の宿る山から魂を授かり、この世に生を受けて、死後その山へおもむき、神として鎮まるとも考えられていました。高くて形のよい山は、豊かさの源であり、魂の鎮まる地であると同時に、神聖な場所として、麓の人々から敬われていました。

羽黒修験道では三山の特徴から、羽黒山は現在の幸せを祈る山(現在)、月山は死後の安楽と往生を祈る山(過去)、湯殿山は生まれ変わりを祈る山(未来)と見立てられました。生きながら若々しい生命をよみがえらせることができるというその信仰は、江戸時代に庶民の間で現在・過去・未来を巡る「生まれ変わりの旅」(羽黒修験道では「三関三渡の旅」と言う。)となって広がりました。

(2) 歩いて感じる神秘の山々

羽黒山を訪れると、日本最長級の2,446段の石段と、その両側に立つ樹齢300~500年の杉並木に外界とは異なる空気を感じるでしょう。国宝「羽黒山五重塔」の素木づくりの凛々しい姿を拝み、見上げるほどの杉の古木に囲まれながら自然の畏怖を体感できます。一段一段祈りを捧げながら石段を登った先には、東北最大級の茅葺屋根建造物である荘厳な三神合祭殿が参拝者を待っています。

標高1,984mの月山山頂には月読命を祀る月山神社があります。夏になると、山開きを待ちわびた人々で山が賑い、参拝者の列が山頂の神社まで連綿とつながります。月山はミヤマウスユキソウやリンドウ、クロユリといった高山植物の宝庫でもあり、美しい花畑が広がる様はさながら極楽浄土のようです。



「湯殿山道中略図」賑わう山形市七日町の背景に出羽三山（山形美術館所蔵）



埼玉県志木市
柳瀬川の湯殿山碑



出羽三山詣

出羽三山信仰において、最も神秘性をもって語られる湯殿山は頂部からお湯の湧き出る赤色の巨岩を御神体として祀ります。そして、山自体が神聖なものとして崇拝されるため、参拝者は素足になって御神体を拝みます。羽黒山から月山、そして湯殿山へと山から山へ参拝を続け、ようやく目にする御神体は、生涯忘れられない光景として人々の目に焼きつきます。東北の自然に惹かれてこの地を訪れた松尾芭蕉や齋藤茂吉は、その感動を句や歌に詠みました。また、湯殿山麓の寺院には全国的にも珍しい即身仏が安置され、今なお地域の人々の信仰の対象となっています。

(3) 出羽三山信仰が育む精神風土

山形に生まれた私たちは山や海に囲まれて生活しています。そして、豊かな自然を目にし、その歴史や文化にふれるたびに、先人たちが大切にしてきた「厳しい自然を生き抜く知恵」「自然を崇拝する心」「祖霊を崇拝する心」を感じることができます。

山形の人は実直で、律儀で、勤勉であるし、また、やさしく、思いやりがあり、おもてなしの心を持っているとも言われます。これは、山形が誇るべき精神風土と言っても過言ではないでしょう。

山形の即身仏(ミイラ)～生と死に対する精神風土が見える世界～



鉄竜海上人の即身仏

- ① 鉄門海上人（注連寺・鶴岡）
- ② 真如海上人（大日坊・鶴岡）
- ③ 本明海上人（本明寺・鶴岡）
- ④ 鉄竜海上人（南岳寺・鶴岡）
- ⑤ 忠海上人（海向寺・酒田）
- ⑥ 円明海上人（海向寺・酒田）
- ⑦ 光明海上人（蔵高院・白鷹）
- ⑧ 明海上人（個人蔵・米沢）

出羽三山山伏修行体験塾

山伏とは修験者のことであり、その修行は死と再生（＝生まれ変わり）の行であり、十界の行（＝断食・水絶ち・抖そう・南蛮いぶしなど）と厳しいものです。山伏修行体験は、白装束を身にまとい、俗世界から離れて修行の一端を体験し、出羽三山の自然、そして修験道を学びます。いわば、自然と一体となって自然のエネルギーを体内に吸収すること、自然と人間との共生を体感すること、そして、日本古来からの山伏の精神文化を実際に体験することで自分自身を見つめ直す事として行われています。



出羽三山山伏修行体験

コラム 8

ミシュランの最高格付けランク 「羽黒山参道の杉並木」

レストランの格付けで知られるミシュランの観光ガイド「ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン2009」（仏語版）の日本を代表する観光地の紹介の中で、樹齢300年以上の杉並木が立ち並ぶ姿が圧巻の鶴岡市の「羽黒山参道の杉並木」が、最高ランクの格付け・三つ星★★★＝「わざわざ訪れる価値のある場所」に選ばれています。

この他にも、二つ星★＝「近くにいれば寄り道をして訪れるべき場所」に、羽黒山の「三神合祭殿」、国宝「羽黒山五重塔」、「齋館」、鉄門海上人の即身仏が眠る「注連寺」が選ばれました。



羽黒山参道の杉並木



In Yamagata, there are many mountains well known to the Japanese people. Among them, the “Dewa Sanzan” (Three Mountains of Dewa): Mt. Gassan, Mt. Haguro and Mt. Yudono, in particular, have been visited by many people since olden days. People believe that Mt. Haguro stands for the world of the present, Mt. Gassan for that of the past, and Mt. Yudono for that of the future. Therefore, many people have traveled through the Dewa Sanzan by starting from Mt. Haguro, practicing *shugyou* (ascetic training) on Mt. Gassan, and being spiritually reborn at Mt. Yudono.

At Mt. Haguro, there are 2,446 stone steps, one of the longest sets in Japan. On both sides of the steps stand magnificent cedar trees, each about 500 years old. On the way to the top, there is the *gojumoto* (five-storied pagoda) that is designated as a national treasure. In summer, you see beautiful mountain plants everywhere on Mt. Gassan. On Mt. Yudono, many people pray in bare feet to the huge sacred rock.



黒川能野外能楽「水焰の能」(7月)



王祇祭の豆腐焼き

蠟燭能の後の役者と客の交流会

黒川能・春日神社旧例祭「王祇祭」(2月1日~2日)

2 受け継がれてきた 祈願の舞

コラム 9

民俗芸能の宝庫「真室川」

秋田と山形の一部に伝わる神楽の一種に番楽があります。番楽は、約350年以上前に修験者が伝えたものとされており、県内には6つの番楽が残されています。真室川町には今も平枝・釜淵・八敷代の3地区に残されており、地区の祭りの時に神社に奉納する神事として行うのが基本とされています。番楽は、未来に伝えたい山形の宝であり、大変貴重な伝承文化になっています。

また、真室川町にはこの番楽だけではなく、昔話や童歌、囃子など多くの伝承文化が残されています。この伝承文化を受け継いでいくため、地域一体となった取組みが行われています。



真室川町「平枝番楽」

(1) 霊峰月山の麓で500年以上も続いた民俗芸能 —黒川能—

①黒川能の歴史と魅力

黒川能は、春日神社の「神事能」として500年以上もの長い間、鶴岡市櫛引地区の黒川の住民の手によって受け継がれてきました。黒川の皆さんが能役者で、囃子方を含め、子どもから長老まで約150人、世襲によって受け継がれます。1976(昭和51)年5月には国の重要無形民俗文化財に指定されました。黒川の地区によって上座、下座に分かれ、それぞれ能座を作っています。上座、下座は競い合い、また助け合い、今日まで途切れることなく残ってきました。

②黒川能の心「王祇祭」(2月1日~2日)

鎮守である春日神社の年4回の例祭に、神事として黒川能が奉納されますが、中でも天地凍てつく旧正月(2月1日~2日)に行われる「王祇祭」は最も重要な祭りとなっています。また、「王祇祭」は別名「豆腐祭」とも言われます。祭事に関わるすべての仕事は、「世帯持ち」と呼ばれる当屋に頼まれた4名の男女の責任で進められます。食材の準備や豆腐焼きなど1年をかけて準備します。王祇祭と黒川能は、お互いに命を与え合い支え合っています。そして黒川の人びとの生活サイクルは、王祇祭を中心にめぐっています。祭りと能と生活が一体となった地域、それが黒川であり、黒川能の里です。

③黒川能野外能楽「水焰の能」(7月最終土曜日)

夏に野外で行われる「水焰の能」は故郷の豊かな実りと人々の招福息災を祈るものです。「水面に映し出される能楽」と「かがり火のゆらめき」が能役者の洗練された能舞と融合し、見る者を幻想的な世界に誘います。

黒川能の多くが神への奉仕と奉納という形で社殿等で演じられている中、定期的に行われている野外演能は「水焰の能」だけです。

④黒川・蠟燭能での交流会(2月第4土曜日)

2月末には、春日神社内の能舞台で蠟燭の灯りが揺らめく中、幽玄の能が舞われます。特にこの時は、第2部の交流会で、凍み豆腐煮などの郷土料理や樽酒を囲みながら、お客様と能役者や地元ボランティアスタッフとの交流で盛り上がります。



遊佐町蕨岡「杉沢比山」



谷地どんが祭り「林家舞楽」



安久津八幡宮「延年の舞」三射舞と姥舞

(2) 鳥海山信仰が育んだ蕨岡の歴史と文化－杉沢比山－

「杉沢比山」は、鎌倉時代から鳥海山入峰修行の二之宿であった杉沢集落に伝わる番楽で、鳥海山を道場とする修験者によって伝えられ、1978（昭和53）年5月に国の重要無形民俗文化財に指定されました。毎年8月6日（仕組）、15日（本舞）、20日（神送り）の3日間、杉沢熊野神社境内で舞が奉納されています。

番楽とは修験者達によって演じられてきた神楽で、能楽が大成する以前のいろいろな芸能の要素を含んでいます。舞台は拝殿前向かって右側の神社境内に組み、夜遅くまで笛、太鼓、銅拍子、小太鼓等の囃子の音が響き、舞手は、ほとんど無言で謡に合わせて踊ります。

(3) 1,200年の伝統を受け継ぐ舞楽－林家舞楽－

「林家舞楽」は、河北町の谷地八幡宮宮司林家に伝わる舞楽で、1,200年の伝統を持ち、1981（昭和56）年1月に国の重要無形民俗文化財に指定されました。昔は山形各地で舞楽が行われていましたが、現在は谷地八幡宮の秋の例祭（9月14日・15日）に同社境内で、寒河江市の慈恩寺の春の法会（5月5日）に同寺山門に設けられた舞台で舞われています。

(4) 安久津八幡宮「延年の舞」－安久津延年－

高島町の安久津八幡神社の秋の例大祭では、およそ1,000年の歴史を持つ「延年の舞」を地元の小学生が気品高く、古式豊かに舞います。

延年とは、平安末期から室町時代に栄えた寺院芸能の一種で、法会・法要などで舞ったものと伝わる舞楽です。神社へ奉納する舞であるため、地元では神楽舞として継承され、2005（平成17）年3月に県の無形民俗文化財に指定されました。

舞楽は全部で7曲あり、「姥舞」などの2曲は舞師が舞いますが、「三射舞」などの5曲は稚児舞とも呼ばれ、地元の小学生の男児が舞います。

コラム10 奇習「アマハゲ」 遊佐の小正月行事

「アマハゲ」とは、遊佐町吹浦地区の滝ノ浦・女鹿・鳥崎集落に伝わる「遊佐の小正月行事」の一つで、国の重要無形民俗文化財に指定されています。

「ケンダン」という蓑を身にまとい、鬼の面をつけた若者が奇声を上げながら家々に上がり込み、小さい子どもを抱き上げて脅かしたり、玄関に投げつけたりして暴れます。一方、アマハゲはお年寄りの肩をもむなど優しさも併せ持ち、一家の当主は酒と餅を用意して歓待します。

冬季間、仕事をしないいろいろにあたってばかりいると手足にできるという火だこ「あまみ」をはぎ取る「あまみはぎ」が転じたものとされ、怠け心を戒める行事として江戸期に始まったと考えられています。



There are many folk performing arts that have been handed down from generation to generation in Yamagata Prefecture. In Kurokawa, Tsuruoka City, their original *noh* has been performed for more than 500 years. Warabioka, Yuza Town, has an original *bangaku* called the “Sugisawa Hiyama Dance.” *Bangaku* is a type of *kagura* (shinto song and dance dedicated to the gods) performed by the ascetics of Mt. Chokai.

Also in Fukura, Yuza Town, they have an event called “Amahage.” At this event young people disguised as *oni* (ogres) visit houses. They say it began in order to warn children against laziness. In Yachi, Kahoku Town, they have the “Hayashi-ke *Bugaku*” (Hayashi Family Court Dance). This is *gagaku* music accompanied by dancing, and it is one of the four greatest *bugaku* in Japan. *Gagaku* is one type of traditional Japanese music, and it is said to be the oldest form of orchestra in the world.



西ノ前遺跡（山形県舟形町）



西ノ前遺跡の場所（赤丸）



西ノ前遺跡発掘作業の様子（平成4年舟形町）



「縄文の女神」の出土状況



上空から見た西ノ前遺跡

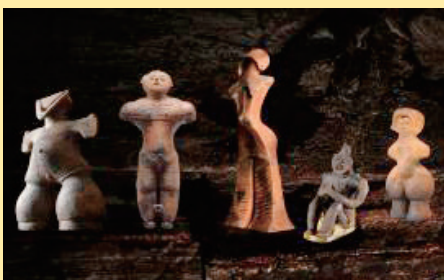
3 国宝土偶 「縄文の女神」 —美と祈りの世界—

コラム 11

山形の国宝

2011（平成23）年まで、山形県内では、致道博物館所有の「太刀 銘信房作」、^{たち めいぶふささく}「太刀 銘真光」、出羽三山神社の「羽黒山五重塔」、米沢市所有の「紙本金地著色洛中洛外図」、^{しほんきんじしやく}「上杉家文書」が国宝として指定されていましたが、2012（平成24）年に土偶「縄文の女神」が国宝に指定され6件となりました。

国宝に指定されている土偶は全国で5体あり、写真左から、「仮面の女神」（長野県茅野市）、「中空土偶」（北海道函館市）、真ん中に堂々と位置しているのが山形県の「縄文の女神」です。その右隣が「合掌土偶」（青森県八戸市）、そして「縄文のビーナス」（長野県茅野市）です。



VR作品「DOGU - 国宝になった女神-」より

(1) 国宝土偶「縄文の女神」の価値

1992（平成4）年に舟形町西ノ前遺跡から出土した大形の土偶「縄文の女神」が、2012（平成24）年9月6日に、国宝に指定されました。

「縄文の女神」は、4,500年前の縄文時代中期に作られた現代彫刻にも通じるフォルムで、国の文化審議会は「縄文時代の土偶造形の一つの到達点を示す優品として代表的な資料であり、学術的価値が極めて高い」と高く評しました。また、高さは45cmを誇り、完全な形の土偶としては国内最大となります。遺跡からは他の土偶の破片も見つかっていて、この破片47点（残欠土偶）もあわせて国宝になりました。

これまで、フランス、中国、ドイツ、イギリスの各国で展示され、日本の縄文時代の逸品として広く知られています。フランスの展示では、当時のシラク大統領がこの土偶を高く称賛しました。土偶は「縄文時代の人々の精神文化が生み出したもの」と言われ、その目的は、安産や豊穰への祈り、生命の再生を願うものと考えられています。「家族が病気やけがをしないように」「食べ物がたくさんとれますように」という願う気持ちなども込めて作られたのかもしれませんが、また、壊すことを前提に作られている土偶も多くあり、壊して、ムラの中に廃棄する行為を「よみがえり」の象徴とする考え方もあります。

◇西ノ前遺跡について

西ノ前遺跡は、奥羽本線 J R 舟形駅の西約300mにあります。遺跡のすぐ北側には鮎釣りで有名な小国川、西側には最上川が流れ、周りは豊かな森が広がっています。1992（平成4）年の発掘調査で縄文時代中期、今から約4,500年前の集落と判明しました。竪穴住居跡9、袋状の穴60、沢状のくぼ地などが見つかっています。くぼ地は東西36m、深さ2.5mの落ち込みで、そこから整理箱で約750箱分もの土器・石器が出土しました。「縄文の女神」もこのくぼ地から5つに割れて見つかっています。

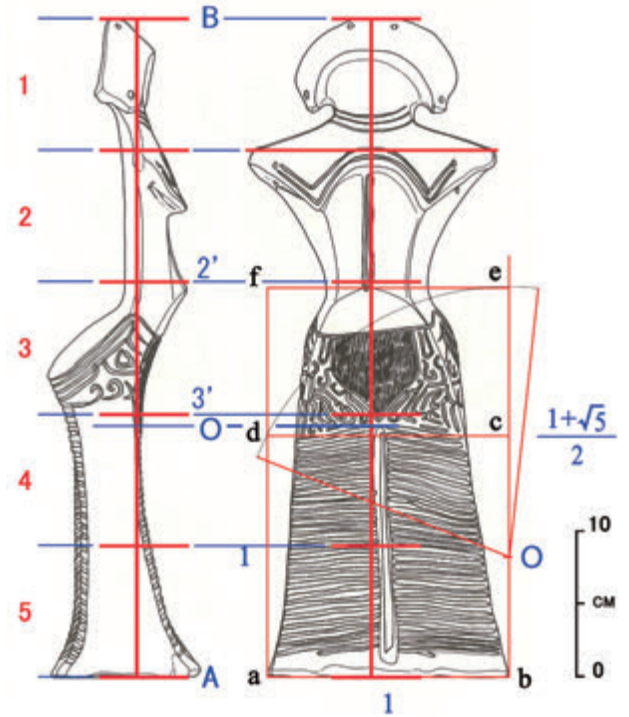
出土品には、調理に使用する縄文土器、装飾品として使用されたと考えられる耳飾り、狩りや調理で使う石器などがありました。どれも当時の生活の様子を生き活きと語るものです。



縄文の女神（正面）

縄文の女神（右側面）

縄文の女神（背面）



縄文の女神5等分と黄金比分割

—西ノ前土偶の美しさについての—考察（安部実）より—

（2）縄文の女神、その美しさの秘密

「縄文の女神」は学術的な価値とともにすらりとした美しさ、姿も注目されています。まず、正面ですが、張り出した胸、腹部そして後ろに突き出た尻など、表面の丁寧な調整とともにシャープな造形は、見た者を魅了する力があります。次に、胴部は板状で薄く作られ、ややのけ反っています。シャープに突き出た腹部から尻にかけて絶妙なバランスを保持しながら、安定的な角柱状の脚部へと流れていきます。最後に背面ですが、全体を4度ほど傾け、左右の脚を前後に少し開いています。頭部の穿孔や背中の背骨など均整のとれた表現がされています。

また、日本情報考古学会誌（Vol.18 no.12,2012）に掲載されている「西ノ前土偶の美しさについての—考察（安部実）」では、縄文の女神の美しさについて次のように考察しています。

土偶を主に正面から見て、その造形の中に均整（バランス）良い比率がどのように取り入れられているのか焦点を当ててきた。基本には身長が5等分されていることがあり、これに協応するように円弧の意匠があり、黄金比分割（1：1.618 芸術・建築・デザインなどの分野で美しいバランスを生み出すものと考えられてきた比率）が潜んでいることがわかった。これらは均整ある比率を持つものは安定して美しく見えるということであると考えられる。

コラム 12

ウォッチング「縄文の女神」

土偶を真上や真下から見てみるといようなことが推察できます。

真上から見ると、頭や肩に小さな穴が開けられています。鳥の羽や草花などを飾ったのかもしれませんが。

真下の足の裏側には、穴が開けられ、竿などにさして象徴として高くかざしたのかもしれませんが。



真上からの様子



真下からの様子

※国宝土偶「縄文の女神」は県立博物館に常設展示されています。



The Nishi-no-mae site is located in Funagata Town, Yamagata. It is a 4,500-year-old site, from the Jomon period. In 1992, a *dogu*, or clay figure, in the shape of a very beautiful woman was discovered there. It was named the “Jomon-no-Megami” (Goddess of Jomon), and was designated a national treasure on September 6, 2012. It was exhibited in France, China, Germany, and the UK, and is known to people all over the world.

It is thought that people of the Jomon period made *dogu* to pray for the safe delivery of a baby, good harvests, and rebirth. They prayed that their family would not suffer from injury or disease, and that they would have lot of food.

Jomon-no-Megami is a wonderful *dogu* that is important for studies about the period. At the same time, it attracts many people with its beautiful slender figure.



米沢市入田沢塩地平の草木塔（1780年建立—最古の草木塔）



草木塔の里 田沢マップ（米沢市田沢地区）

4 山形人の心が見える世界

コラム 13 草木塔のこと

「ふるさと山形の信仰を探る」千歳 栄
（平成8年7月11日NHKラジオ放送より）

立石寺で有名な山寺に、山形市が数寄屋建築の山寺芭蕉記念館とその隣接地に民間の方が山寺風雅の国という施設を建設した時に、私はその建築を担当させていただきました。敷地に立っていた樹木のうち、どうしても切らなければならないので、止むを得ず切った樹木が数本ありました。その切った樹木の霊を供養したいと考え、施主の方をお願いして、草木塔を建立させていただきました。

山形県には、草木の恵みへの感謝と神秘への畏敬の念から草木塔を建立する風土がありました。この草木塔は、私たち山形県民の精神的モニュメントではないかと、私は思っております。現代は科学技術が急速に発展しておりますが、その反面、自然破壊が地球規模で進み、自然を保全し、自然と人間との関わり方が非常に難しい時代であるだけに、草木塔の思想は、人間と自然が共生するための一つの示唆を与えてくれると思うのであります。



(1) 草木塔が語りかける自然と人間の共生

草木塔は、「草木供養塔」「草木塔」などという碑文が刻まれている塔であり、ほとんどが採石された状態のままの自然石です。草木塔には、自然を畏れ敬い草木に感謝して生きてきた昔の人々の生活が刻まれており、地域を受け継いできた多くの人々の歴史が刻まれています。

江戸時代の1780（安永9）年に建立された米沢市入田沢塩地平の草木塔は、現存する草木塔の中で最古のものとされ、1997（平成9）年には、米沢市の有形文化財に指定されました。しかし、山間部の自然環境下で、200年余りの間厳しい風雪等に晒されてきた結果、草木塔（石造物）の風化が進み、塔の左上部の欠落や多数の亀裂が塔全体に生じていることから、現在は、屋根をかけて保存しています。

田沢地区は昔から林業がとても盛んなところでした。御林と呼ぶ米沢藩（上杉氏）の御料林を抱え、バイタ（薪材）を川を使って米沢城下へ送る大規模な「木流し」が、江戸時代から昭和初期まで続いていたのです。田沢の人々にとって、山仕事と木流しは暮らしの中でなくてはならないものであり、昔から草木（樹木）に対する感謝の心、自然の力に対する畏敬の念を抱いてきました。

草木塔の総数は全国で184基（2013年）、江戸期の草木塔は34基で、そのうち32基が置賜地方にあり、中でも草木塔発祥の地とされる田沢地区には、江戸期に建てられたものが10基あります。

(2) 世界に伝える「草木塔の精神」

～山形大学の取組み～

2007（平成19）年8月29日、山形大学の小白川キャンパス人文学部棟の南側に草木塔の碑が建てられました。碑文は「草木塔の心 自然と人間の共生」で、「心」を付した碑文は全国でも初めてのことです。

山形大学は、山形県置賜地方を中心に江戸時代から信仰された独自の文化である「草木塔」は、自然を畏れ敬い、自然の恵みに感謝し、草木の命さえいとおしむもので、山形の風土文化を特徴づけるものとし、その上で、この草木塔の精神を全国に、そして、世界に広めていきたいと考え、様々な活動に取り組んでいます。



山形大学小白川キャンパスの「草木塔の心」の碑



天童市若松寺のムカサリ絵馬



日本で初めての給食（鶴岡市大督寺内私立忠愛小学校）
メニュー（おにぎり・塩びき・煮びたし）

（3）親の深い愛情が見えるムカサリ絵馬

「ムカサリ絵馬」は、若くして亡くなった子どものために親が婚礼の儀式（ムカサリ）の絵を作り、寺社に奉納したものです。「冥婚」「死後婚」と言われているもので、天童市若松寺の他に山形にはムカサリ絵馬奉納の寺社がいくつもあります。

交通事故・戦争・病気等の理由で結婚せず亡くなった子のため、親や兄弟、親戚が描き、供養します。もちろん相手は架空の人物で、「せめて来世で幸福になってほしい、そして、今度は健康で長寿をまっとうできる人として生まれ変わるように…」という親の深い願いが込められています。また、昭和以前の絵馬は、現世で果たせなかった夢を描いたものが数多く残っていて、若松観音堂が重要文化財に指定されるまで、御堂の四面に重なるように掛けられていましたが、その後、元三大師堂下に安置、1988（昭和63）年絵馬堂を建立し、絵馬を修復し整理しました。現在は約1,300体以上あり、近年供養中の絵馬は本坊（祈祷所）に安置しています。

（4）すべての子どもを笑顔に～日本最初の学校給食～

1872（明治5）年に学制が發布され、全国に小学校が置かれることになりましたが、家庭生活が困窮して小学校に入れられない子どもも多くいました。特に山形県の就学率は当初50%に満たない状況でした。

このため貧しい子どもたちにも教育の機会を与えようと、鶴岡の寺院が宗派をこえて、1889（明治22）年に、大督寺の本堂の一部を利用して“私立忠愛学校”を開設しました。しかし弁当を持ってこられない子どもも多くいたため、無償で昼食を支給しました。この時の給食メニューは、おにぎり・塩びき・煮びたしだったということです。笑顔で給食を食べ元気に勉強する子どもたちの姿が浮かんでくるようです。

これが日本における学校給食の始まりとされています。

戦後の1947（昭和22）年になって、全国の児童300万人に対し、学校給食が開始されました。

コラム 14 心が見える方言（感謝の言葉）

- ありがとうさま（村山）
- ありがとうさん（最上）
- おしょうしな（置賜）
- もっけだの（庄内）

「ありがとう」という感謝の言葉を表す山形の方言に「もっけだの」という庄内弁があります。これは、「ありがとう」の他に、「すまねえ、わりなあ」という申し訳ない謙虚な気持ちがあるとされています。

同じような言葉に置賜地方では「おしょうしな」という言葉があります。「しょうしい」という方言は恥ずかしい、恐縮ですというような意味ですので、「おしょうしな」は「こんな大したことないことで喜んでいただいて恐縮です」「こんなに良くしていただいて恐縮します」というような意味から使われだした言葉だと思われます。

また、感謝の言葉で村山地方では「ありがとうさま」、最上地方では「ありがとうさん」と大変丁寧に言っています。「お互い様」「お陰様」「ご苦労様」の様文化は日本の精神文化でもあると言われ、山形の方言にもよく表れていると考えられます。

このように、謙虚になり、相手を思いやる気持ちを言葉に表している山形の方言は、山形の誇るべき県民性と言ってもいいのではないのでしょうか。



The people of Yamagata have given thanks to the blessings from nature since the olden days, and have made monuments called *somokuto* (grass-tree tower). Many *somokuto* can be seen in the Okitama area of Yamagata Prefecture. The *somokuto* of Iritazawa-shiojidaira in Yonezawa City is the oldest in Japan, made in 1780.

The people of Yamagata also care deeply for others. In Jakushoji Temple in Tendo City, there are many dedicated wooden plaques called *mukasari ema*. On *mukasari ema* the wedding scenes of children who died young are drawn. The *mukasari ema* hold the parents' strong wishes for their children to be happy—at least in their next life.

Tsuruoka City in Yamagata Prefecture is the place where the school lunch system started for the first time in Japan. Free school lunch was offered to children whose families were too poor to make their own *bento* lunches.